

日本スポーツ社会学会・研究委員会企画「教育とスポーツ」講演会

演題：平成時代の大学入試改革と学生に期待される“能力”

スポーツ推薦を取り巻く入試環境の変化を考える

講師：中村高康先生（東京大学大学院教育学研究科）

司会：西山哲郎（関西大学人間健康学部）

日時：9月2日（火）14時～16時

会場：明治大学駿河台キャンパス・リバティータワー1135教室

このご講演の主旨は、スポーツ推薦入試に限定された話をお聞かせいただくことではなく、第二次世界大戦終了時から現在までの、日本の大学入試制度全体の歴史的变化と現状について解説していただくことでした。

中村先生によると、日本の大学入試制度を考える上で要点は二つあり、一つは統一試験制度で、もう一つは選抜方法の多様化です。

そのうち統一試験制度について、その端緒は1949～1954年まで行われた「進学適性検査」にあります。戦後まもなくの大学入学者選抜制度は、GHQの主導で導入されたもので、教育心理学者・エドミンストン博士の示した三大原則、受験者の「過去・現在・将来」に関するパフォーマンスの判定で合否を決めるものでした。このうち、「過去」については高校の評価書によって、「現在」については筆記試験でパフォーマンスが測られますが、「将来」については、心理学的な適性検査で判定していました。そのため、努力によって補えない生来の適性で合否判定することに反発が強く、長続きしなかったようです。その後、1979年から始まった共通一次試験では、「現在」のパフォーマンスを測る筆記試験に限定したことと、統制の効く国公立大学に参加校を絞ったおかげで、統一試験制度の導入は達成されました。共通一次試験は、その後センター試験となって私立大学にも参加校が広がり、現在に到ります。

二つ目の要点、選抜方法の多様化については、1955年に面接入試の実施が公認されたことに始まります。面接入試は、それ以前も一部で非公式に行われていたようですが、これ以降、公に行えるようになります。大学の大量化と受験競争の激化が目立つようになった1967年には、高等学校長の推薦による推薦入試が公認されます。さらに、第二次ベビーブーマーが大学生となる1990年にはAO入試が登場しました。2000年代に入って、合格者の半数まで推薦入試（非競争入試）での入学が認められるようになった結果、現在では各大学で工夫した多種多様な入試制度が実施されるようになっています。

以上を概括すると、歴史の全体的な流れとして、大学入試の公平性の確保という観点か

らは一貫して緩和の方向に進んできたように見えます。しかし、1960年代後半から1980年代までの若年人口の増加に大学の増加が追いつかなかった時代は、多様化は進行しつつも一般学力入試が多くの大学で重視されていました。しかし、1990年代以降は、受験生人口の減少を見越して入学試験の多様化が加速され、現在の混沌とした状況を招いたようです。

ただし、現在の状況を分析的に見てみると、昨今のバラエティ溢れる入試方式でも、戦後すぐにエドミンストン博士が提示した「三大原則」で測られるパフォーマンス評価のどれかには該当するものを指標に合否判定を行っているようです。本田由紀教授（東京大学）が指摘する「ハイパーメリトクラシー」論にしたがって、この状況を、人間を評価する能力指標が多様化したとみることも可能ですが、それよりは、以前なら面接等で曖昧に評価されていた能力が、客観的に点数化できるよう試験制度の工夫が進んだと考えるべきかもしれません。司会の立場からこれをまとめると、入試で評価される能力が多様化したというより、人間の能力に関する不安が高まり、能力の物象化が進んだのが現状のようです。

以上のような認識から、スポーツ推薦入試に話を絞って考えると、かつては面接入試などに紛れて行われていたものが、大学の大衆化と進学率の上昇に伴って個別の制度化を余儀なくされたことで、存在に注目が集まるようになったようです。受験戦争が過熱していた時期（1960年代後半から80年代まで）には、スポーツ推薦入試は拡大に規制をかけられ、学生運動の余波もあって、一部で廃止の動きもありました。

しかし、1990年代以降の大学受験の軟化、入学の容易化に伴って状況は逆転し、さらに2000年代の入試方法の多様化によってスポーツ推薦入試の利用は拡大していきます。現状をデータから見ると、スポーツ推薦入試の導入傾向は、入学難易度と関連（難関校で少なく、容易校で多い）していますが、難関校でも（再）導入が見られるようです。一般に、入試の多様性は入学難易度と逆の相関をもちますが、同様の傾向がスポーツ推薦にも見られるようです。その一方で、2000年代以降に日本全体に広まった将来の見通しの暗さから、身につけるべき能力の選択に関する不安が高まっている中で、スポーツ推薦入試で入学した学生に対する目は、以前より厳しくなっている可能性があります。

最後に司会の感想として、スポーツ推薦入試という研究課題は、現代社会において教育上評価されるべき能力とは何かという重大な問題を含みますので、スポーツ社会学者が避けて通れない問題であると同時に、我々だけで取り組むには射程が広すぎるテーマかもしれないと思いました。今後は教育学や教育社会学などでも取り組む人が増えることを期待したいところです。

（文責：西山哲郎）